民謡「おばば」の発祥と伝播

－歌詞をとおして－

服　部　克　巳

A Study of How the TRADITIONAL JAPANESE FOLK SONG "OBABA" Has Been Handed Down in Japanese Society

－Words of Songs－

Katsumi Hattori

Summary

The primary purpose of this work is to investigate "OBABA", a type of Japanese Folk Song which has become unpopular recently and to inquire into its origins.

Furthermore, I analyzed the words of the songs.

Through this study, I would like to clarify the different ways of singing in each local district, taking account of the variations in accordance with the changes of time.

Received Oct.31,1997

Key words： Folk Songs, Words of Songs,

1　は　じ　め　に

"おばばどこ行きゃる、三升樽提げて、嫁の在所へ、孫抱きに"と唄われる祝唄の「おばば」は、かっては美濃地方や尾張地方の北西部で、祭りや婚礼、家の棟上げの時の祝唄として、また、さまざまの酒席の最後には必ず唄われていた。しかし、近年は祭礼に参加する若者が減少し、婚礼も企業主導型の披露宴が増加し、さらには車社会における飲酒運転の危惧、カラオケの流行など、社会の変化に伴いしだいに唄われなくなり、現在ではほとんど聴かれ

なくなってしまった。

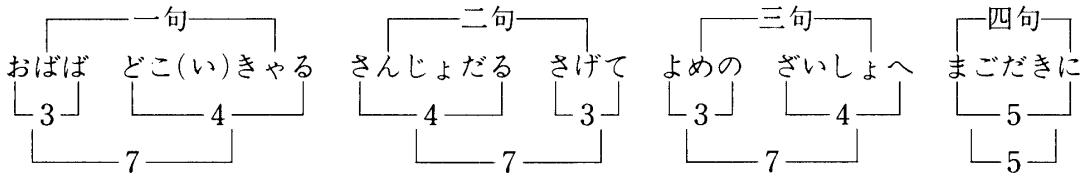
このような状況が進行しつつあるが、まだこの民謡「おばば」を唄える方が各地に生存しておられる。そして、その唄い方は歌詞・節（旋律）ともに地域により差異がある。そこで、各地の歌声を収集し、歌詞や唄い方など伝承の経緯について研究する必要性を痛感した。幸い教員時代に交流した知人が各地におられるので、かって聴かせていただいた方々に面談しこの「おばば」を収録した。その伝播は、県・市、町・村といった行政上の境界線とはまったく関係のないもので、河川、街道、宿場など人々の交流によるところが大きい。

各地の「おばば」の歌詞とメロディー・唄い方の差異を調べ、史実とも照らし合わせて、その伝播過程を考察したいと考えた。

なお、今回は紙幅の都合もあるので、歌詞についてだけをまとめた。

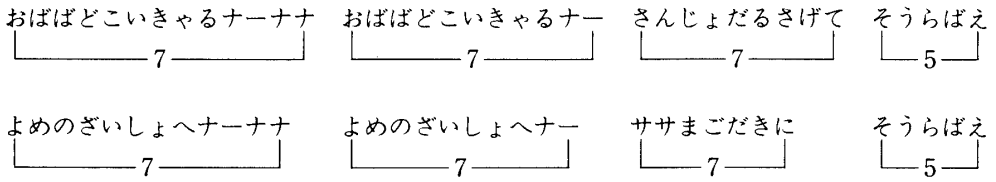
2　伝承による実態

(1)「おばば」の同名異曲



民謡「おばば」は上記のような詩形であるが、歌唱の実態は地域によって異なる。その一つは七七七五文字をそのまま続けて唄わないで、2連（1番と2番）に分けて唄われている。

つまり、1連目（1番）は、一句を2度繰り返し、次に二句を唄い、そのあとに“そうらばえ”をつけて七七七五の形にし、2連目（2番）は、同様に三句を2度繰り返し、次の四句の“まごだきに”は5文字しかないので、“ササ”とか“はつ”などの2文字を加えて7音にして、1連目（1番）と同じ語句“そうらばえ”をつけて唄うのである。七七七五、七七七五の形に整え、2連に分けて下記のように唄っているのである。



このように、一句と三句を2度繰り返して唄い、最後に“そうらばえ”を加えて唄う「おばば唄」は美濃地方と尾張地方の北西部に限られた現象である。「おばば」と同じ歌詞、あるいは似た歌詞の曲も他県に見受けられるが、旋律が異なり、一節を2連に分けて七七七五・

七七七五と唄われることもなく、同名異曲の唄といわなければならないだろう。

岐阜県において、一句および三句を繰り返さず“そうらばえ”を加えない唄い方、すなわち、「おばば」の歌詞の七七七五をそのまま続けて唄う「祭り唄」や「地形唄」がある。しかし、それは元唄ではなく、「おばば」の歌詞は一番始めに使われていない。ただ単に七七七五の歌詞をそのままその唄にはめ込んだというにすぎない。

たとえば、郡上踊りの「川崎」の旋律にあわせて「おばば」を下記のように唄うこともできる。

おばばどこ(い)きゃる　さんじょだるさげて　よめのざいしょへ　まごだきに
ぐじょうのはちまん　でていくときは　あめもふらぬに　そでしぼる
└──7──┘　└──7──┘　└──7──┘　└──5──┘

すなわち、近世調の七七七五の歌詞で構成されている曲ならばどの唄にも転用できるので、めでたい「おばば」の歌詞を使った同名異曲の唄はかなり存在している。

県内でも神岡町や上宝村近辺の「祭り唄」、古川町の「ぜんぜの子」、下呂町の「どんびき踊り」、八百津町の「しで踊り」などの曲の中で「おばば」の歌詞が唄い込まれている。

県外では、福井県の「三國節」および美浜町の「ぼた餅顔」、長野県飯田市の「婚礼祝唄」などがあげられる。また、地搗唄、石場地搗唄などの中でも、「おばば」の歌詞を組み入れて唄っている地域もある。さらには、以下のように「おばば」に似通った歌詞で唄われる地域もある。

“おばばどこいけや　三升樽さげて　嫁の在所へ　孫抱きに”…和歌山県東牟婁郡
“おばばどこいきゃる　三升樽に鰯を三ごんさげて　嫁の在所へ　孫抱きに”…島根県益田町
“おばばむすどごへいぐ　二升樽さげて　嫁このお里さ　孫だぐに”…青森県八戸市
“おばばどこいく　白足袋雪駄　ままの観音さんへ　乳貰いに”…愛知県東春日井郡
“おばばどちにいく　三升樽さげて　嫁の在所へ　嫁貰ひ”…鹿児島県・御田踊・田植え踊
“おばばどこいっけ　三升樽さげて　嫁が在所へ　孫だっけ”…鹿児島県・孫の名付け祝の唄

遠く離れた鹿児島県に数種類の「おばば」が存在するのは、江戸時代の難事業であったあの宝暦の治水工事（1753～1754）の以後も文化（1804～1818）、万延（1860）、文久年間（1861～1864）に、木曽・長良・揖斐川のお手伝普請に従事しており、その折に覚え鹿児島に持ち帰られたと推測される。鹿児島県にいっそうの親しみを感じさせられる現象である。

「おばば」によく似た歌詞で唄われている例は、長野県や滋賀県の「餅つき唄」「臼挽唄」「石場地搗唄」がある。このように各地に「おばば」の類型が散在している実状をみると、祝い唄「おばば」がかなり古くから唄われていたことを示しているといえるだろう。

(2)祝唄「おばば」の唄い方

現在の「おばば」の唄い方の原型は、江戸時代に流行った「なぞ唄」の唄い方の影響を受

けたのではないかと推測される。「日本の民謡」の著者浅野建二氏もこの唄を岐阜の「おばば」の母体ではないかと指摘されているが、先に例としてあげた各地に伝わる形の唄い方、すなわち七七七五と唄う形が、問答というか会話の形をとっている「おばば」の曲に「なぞ唄」の形がぴったりあうもので、誰かが酒席で面白く唄ったことが受けて繰り返す形がやがて固定したのではなかろうか。その手がかりともなる資料に、『小歌志彙集(嘉永年間1848～1854)』の続編である『小唄のちまた』の記述[1)]にあげられる。天保2年（1831）の冬、名古屋を中心として流行った「なぞ歌」の唄い方と現在の「おばば」が非常に近い唄い方である。

“弓の上手はナナ、弓の上手はナ、江戸の役者ととくわいな、コレ睨んで当てる、さうらばえ”
“夏の夜業はナナ、夏の夜業はナ、安い多葉粉ととくわいな、蚤蚊がわるいで、さうらばえ”
“上手役者はナナ、上手役者はナ、小野の小町ととくわいな、コレ穴がないとて、さうらばえ”
“江戸の幸四郎はナナ、江戸の幸四郎はナ、山吹喜撰ととくわいな、コレお鼻が高いで、さうらばえ”
“岩井半四郎はナナ、岩井半四郎はナ、枕草紙ととくわいな、コレいつも見飽かぬ、さうらばえ”
“火桶火鉢はナナ、火桶火鉢はナ、かわい男ととくわいな、コレかかえてさするで、さうらばえ”
“淀の車はナナ、淀の車はナ、目くらのおせんととくわいな、コレ水にまわるで、さうらばえ”
“上手博奕はナナ、上手博奕はナ、萵苣の畠ととくわいな、コレはるなりとるなり、さうらばえ”
“盲目角力はナナ、盲目角力はナ、川ばた柳ととくわいな、コレ水にもまれる、さうらばえ”
“破れ財布はナナ、破れ財布はナ、瀬田の唐橋ととくわいな、コレ膳所が見えるで、さうらばえ”

真ん中の解き句を抜けば現在伝承されている「おばば唄」と同じ七七七五の形となる。さらに「なぞ唄」の＜かけ句＞に対する＜明かし句＞の対応は、“おばばどこいきゃる、三升樽さげて”の問いに対し、“嫁の在所へ孫抱きに”が答えの句となっている。

ただし、「なぞ唄」は一連一連が独立しているのに対し、「おばば」は1連と2連をあわせて一節となっているところが異なっている。

浅野建二氏の説[2)]によれば、天保以前は繰り返さないで「おばば唄」を唄っていて、この「なぞ唄」に影響されて唄い方が変化したことになるが、その逆も考えられる。すなわち、日本の各地に伝わっている「おばば唄」はかなりの歴史をもっているとも考えられる。繰り返しをする「おばば唄」を「なぞ唄」の方が模して、真ん中に＜解き句＞入れて流行らせた、とも思われ、今後にまだ調査の余地が残されている。

(3)祝唄「おばば」のはやし言葉

民謡がそれぞれの地域で定着するまでには多くの人々の口から口へ、耳から耳へと伝わっていくものであって、方言ともあいまった口承文化であるから、文字になったときにはさまざまな類型が現われる。はやし言葉などには特にその現象が多くでている。“そうらばえ”などのはやし言葉について、県内の実態を調査した結果は下記のようである。前述した天保2年（1831）の冬に名古屋一帯で流行した「なぞ唄」に登場した“さうらばえ”と同じように

“そうらばえ”と現在も唄っている地域もあるが、かなり変化している。

“そうらばえ”……岐阜市、高富町、美山町、笠松町、美濃市、揖斐川町、兼山町、可児市、八百津町、愛知県祖父江町
“そんらばえ”……岐阜市、美濃市
“そうだばえ”……岐阜市、美濃市、関市、根尾村
“そうだわえ”……墨俣町
“そんだわえ”……岐阜市、高富町、美山町、笠松町、揖斐川町、八百津町
“そんだまえ”……岐阜市、美濃市
“そんだもえ”……藤橋村、根尾村
“そんりゃもえ”…藤橋村

「そうらばえ」については、「さぶろう」の転化で、「候らばえ」の文字を当てる説や「ソーリャ」という掛け声[3)]という説がある。ソウと長音に発音するか、ソンと撥音便になるか方言的な要素も大きいと思われる。

また、ラがダやリャに、バがワやマ・モに変化している。

“孫抱きに”の4句目では、音を揃えるためにこの語の前に掛け声的なものを加えて7音とした類型は以下のとおりである。

“ササ　孫抱きに”　……岐阜市、高富町、美山町、真正町、揖斐川町、藤橋村
“ソリャ　孫抱きに”……笠松町、岐南町、墨俣町、美濃市、谷汲村
“はつ　孫抱きに”　……岐阜市、池田町、八百津町、愛知県祖父江町
“アレワイ　孫抱きに”…根尾村

これらの語句はその地方で使われている言葉、方言というものでもない。今回の調査で得られた結果で、その土地に永く住んでいる演唱者の唄声によるものである。ちなみに、初めての出産の時に限って、嫁の在所で出産するしきたりがあったという。

“ヒュル　ヒュル　ヒュー”の類型は10種類にも及び、演唱者の意見や諸説が多く、興味深い。演唱者からの採録結果は以下のようである。

①ヒュル　ヒュル　ヒュー　ヒュル　ヒュル　ヒュー……岐阜市、笠松町、谷汲村、関市、美山町、墨俣町、揖斐川町、愛知県祖父江町
②ヒュー　ヒュラ　ヒュー　ヒュー　ヒュラ　ヒュー……岐阜市、愛知県祖父江町
③ヒュル　ヒュラ　ヒュー　ヒュル　ヒュラ　ヒュー……岐阜市
④ヒョロ　ヒョロ　ヒョー　ヒョロ　ヒョロ　ヒョー……岐阜市
⑤ヒュラ　ヒュラ　ヒュー　ヒュラ　ヒュラ　ヒュー……高富町
⑥ヒュラ　ヒュラ　ヒュー　デンデコデン　……岐阜市
⑦ヒュル　ヒュル　ヒュー　ドン　ドン　ドン　……真正町、揖斐川町、藤橋村
⑧ヒュル　ヒュル　ヒュー　ドン　ドド　ドン　……一宮市
⑨アー　ウイテキタ　ウイテキタ　……関市、美濃市、洞戸村、武芸川町、可児市、兼山町、八百津町

⑩チョウサイジャ　チョウサイジャ　……根尾村
⑪ヒョロ　ヒョロ　ヒョー　ヒョコタンジャイ　……揖斐川町

これらのはやし言葉のいわれについて、①～⑤の系統は、笛の音を模したものとも、長良川の清流に鳴く河鹿の声を模したものともいわれている。⑥⑦⑧は笛と太鼓の音を模したもの、といわれているが、⑨は受唄がつき異なっている。

⑨については、関市・美濃市あたりではこの語句の後に“ひょうたん　川へけっこんだ”と唄い、可児市や八百津町では、この後にさらに続けて“ひょこたん　川へつっこんで　たたいたらすっこんだ　まつだけ見せたらういてきた　ハァーういてきた　ハァーういてきた”などと唄っている。これを受け唄といっている。

このように「おばば唄」のはやし言葉は、岐阜・西濃地域と中濃・東濃地域では異なっている。又、中濃・東濃地域の「おばば唄」では、1節目“おばばどこいきゃる　三升だるさげて　嫁の在所へ　孫抱きに”に続いて2節目を次のように唄っている。

“おばば小便すりゃナーナナ　おばば小便すりゃナー　きつねがのぞく　そうらばえ”
“のぞくはずだよナーナナ　のぞくはずだよナー　古穴じゃもの　そうらばえ”

⑩の“チョウサイ”は資料もなく長い間、意味不明であったが、『笠松町史　下巻』[4]に次の様な関係があると思われる記述がある。天保3年（1832）は日照り続きで雨が降らず大かんばつの年であった。笠松村では人々が八幡神社と天王神社へ各町交互に雨乞いのお百度参りをし、そしてその最後に「調才踊り」を踊った、と記されている。同様の記述が、尾張藩の北方陣屋や下郷宿の『留書き』にも見られる。『ふるさと笠松』[5]にもその後弘化2年（1845）に、祭礼の折、宮地の「テウサイ」が陣屋内に入り、御役所町を祭り一色に塗り潰した、という資料がある。年代や地域が近いところから関係が深いものと考えられる。

⑪は、おばばが重い三升樽を持ってよろよろと歩く様を表現したという説、おばばが三升樽を持って歩いている時、上空を舞っていた鳶の鳴き声を模したという説など、諸説ふんぷんであった。

これらのはやし言葉について私見を述べるならば、“ヒュル　ヒュル　ヒュー”や“ドンドン　ドン”などは笛や太鼓の音を模したものであり、それらのなまった形がいろいろ現われていると考える。さらに、祝唄「おばば」が祭り唄からお座敷唄に導入された時点でこのようなはやし言葉が付け加えられたと推測している。ただし、⑩の“チョウサイ”だけは異質のものと思われる。

揖斐郡池田町在住の松岡浩一氏[6]によると、昭和10年（1935）頃は、祭りで神輿つりの「おばば」では、“そうらばえ”のすぐ後に“わっしょい　わっしょい”と掛け声をかけた。そして、お座敷唄として唄う時は、“ヒュル　ヒュル　ヒュー”と声をあわせたと語っておられる。実際の祭りでは、笛・太鼓で演奏されるが、座敷の宴席では笛・太鼓の楽器はなく、口でそ

の音を模したことの証言である。

『揖斐川町指定文化財調査書　第一集』(昭和44年　揖斐川町教育委員会刊)に見られる古謡「おばば」の項では、“おばば　どこいきゃるナーアナーナ　おうばば　どこへゆきゃるナー三升樽さげて　候らばえー”と唄うこの頃に笛を吹いた、それを離れて聴いていると“ヒュル　ヒュル　ヒュー　ドン　ドン　ドン”と聞こえるとあり、はやし言葉は書かれていない。

藤橋村の「おばば唄」もやはりはやし言葉は書かれていない。前述の名古屋で流行ったという「なぞ唄」にもこのようなはやし言葉は入っていない。

「おばば唄」に、はやし言葉が入る箇所によって、次の3つに分類できる。

イ　一節を2連に分けた1連(1番)、2連(2番)の後にそれぞれ入れる
　即ち1連毎に入れる地域…岐阜市、笠松町、墨俣町、高富町、美山町、美濃市、関市

ロ　一節を2連に分けた1連(1番)、2連(2番)を続けて唄った後に入れる
　即ち1節毎に入れる地域…根尾村、可児市、八百津町

ハ　すべての節を唄い終わった最後にだけ入れるか、またはまったく入れない…藤橋村

前述の天保年間(1830～1844)流行した「なぞ唄」も、中の句をとれば藤橋村の唄い方と同じである。藤橋村の盆踊り唄「おばば」は太鼓と唄だけで踊る素朴なものであり、別名に「ししくどき」の名がある。当村の盆踊り唄は数多くあり、鎌倉時代から唄い踊り継がれているものもあるといわれているが、「おばば唄」はそこまで古くはないだろう。歴史的には古くは交通の要所となった時代もあり、このような素朴さがかえって古い唄ということを示していると思われる。山深い藤橋村では、三味線や芸妓の座敷唄にのせられることもなく、人々の口から口へと唄い継がれて当時の形を長く保ち続けていると考える。

藤橋村の横山周導氏[7]は次のように語っておられる。

> 藤橋村では、明治維新以前はお寺の境内で「おばば」を踊ったり唄ったりしていたが、明治に入って出された盆踊り禁止令によって中断されてしまった。また、長く続いてきた神仏習合時代も神仏分離令よって切り離されてしまった。やがて、その後盆踊りは復活されたが、時代の波にのり、氏神さんの例祭では必ずお宮の境内で踊り唄われるようになった。

藤橋村の「おばば唄」は元唄に続いて次から次へと唄い続けられていく形である。したがってその歌詞は古くから唄い継がれているものもあれば近年の作も含まれている。代表的な部分を紹介する。

“おばばどこいきゃるナーナナおばばどこいきゃるナー　三升樽さげてソオンリャモエー”
“嫁の在所へナーナナ嫁の在所へナー　ササ孫抱きにソオンリャモエー”
“嫁がにくいかナーナナ嫁がにくいかナー　姑のばばよソオンリャモエー”
“可愛い我が子にナーナナ可愛い我が子にナー　ササそうよめをソオンリャモエー”
“可愛い我が子にナーナナ可愛い我が子にナー　そうよめなれどソオンリャモエー”

“もとが他人でナーナナもとが他人でナー　ササにくござるソオンリャモエー”
“姑小姑にナーナナ姑小姑にナー　気が合うてうれしソオンリャモエー”
“たとえ殿さにナーナナたとえ殿さにナー　ササ縁のうてもソオンリャモエー”
“姑小姑にナーナナ姑小姑にナー　気が合うとてもソオンリャモエー”
“殿に縁なきゃナーナナ殿に縁なきゃナー　ササおられよかソオンリャモエー”
“姑小姑にナーナナ姑小姑にナー　気が合うてうれしソオンリャモエー”
“殿の気に合うてナーナナ殿の気に合うてナー　ササなおうれしソオンリャモエー”
“なんとこの頃ナーナナなんとこの頃ナー　他人が可愛いソオンリャモエー”
“育てくだれたナーナナ育てくだれたナー　ササ親よりもソオンリャモエー”

3　地形唄「おばば」のはやし言葉

地形唄は、即興的に作り出されたものも多く、面白い内容であればどんどん唄い継がれ、今も各地に残っていると考えられる。「おばば」も各地の地形唄に取り込まれて唄われてきた。また、前述の中濃・東濃地方で、はやし言葉として登場している“ひょうたん”という言葉も、各地でかなり唄われている。

〈揖斐郡・池田町〉
“ハァー　おばばどこいく　三升だるさげて　嫁の在所へ　ヨホホイ　孫抱きに　孫抱きに　ソラ　オッヒュルヒューノ　ヒョウタン　チョー”
〈本巣郡・巣南町〉
“高い山から　谷底見れば　瓜や茄子の　ヨホホイ　花盛り　花盛り　ア　ヤレ　コリャサンヤノ　ヒョウタン　ジャー”
〈恵那郡・明智町〉
“わごのくまさは　もちがすき　もちがすき　ポンポコネノ　ヒョウタンジャー　ヨイショ　ヨイショ”
〈揖斐郡・久瀬村〉
“おばばどこいく　三升だるさげて　嫁の在所へ　ヤレ　孫抱きに　孫抱きに　イヨ　コリャ　ヒョーオノ　ヒョウタン　ジャー”

この“ひょうたん”というはやし言葉の起こりについて『久瀬村村史』に面白い記述がある。太閤豊臣秀吉が大阪城築城の様子を検分に出向き、地形搗の棒を見て、これは軽すぎると思い、普請奉行伊予守に「伊予、こりゃ　ひょうたんじゃ」といった言葉が記されている。

長田暁二氏は『岐阜県民謡集』[8]の中で、地搗唄には伊勢音頭系、ひょうたんじゃ節系、よいこの節系3種類があり、かって瀬戸内海の大三島から溜池職人たちがやってきて伝えたものが「ひょうたんじゃ節」と述べている。

そこで、愛媛県・大三島町へ「ひょうたん節」およびそのはやし言葉などについて問い合せた。返信は、『大三島町史』には記載されていないが、町内の民謡に精通した市川優勝氏（大

三島町野々江在住）に確認をしたところ、かっては大三島町大字宗方地域に伝わる「船おろし」の際に唄われていたが現在はこの「船おろし唄」は唄い継がれていない、という内容であった。しかし、参考までにということで、当時の唄の尺八の譜面が送られてきた。

その一節を紹介したい。

“新装作りて　おろして見れば　沖のかもめの　ホイ　ホイ　ホ　浮き姿　おもしろや　イヨホーがひょうたんじゃ　アラ　エートモ　エートモ”

上記のような例は、長田暁二氏が指摘されたように「ひょうたん節」を四国・中国地方の職人たちが美濃の地へ運んできたことを裏付ける資料のひとつであろう。

4　「おばば」が唄われた時

本研究で考察しようとしている「おばば唄」は、地形唄や同名異曲の項で紹介した七七七五を繰り返さずそのまま唄う「おばば唄」ではなく、一句を2度繰り返した後に二句を続け終わりに“そうらばえ”を加えた唄い方の「おばば唄」である。

この「おばば唄」はどんな時に唄われていたか、その調査内容を以下に述べる。

(1)祭礼の時　(2)出産、婚礼、新築などのめでたい席　(3)酒宴の席　(4)その他　に分類し、各地域の実態をまとめた。

(1)祭礼の時

イ　〈揖斐郡池田町〉神輿つりの廻り唄として唄う。

ロ　〈揖斐郡揖斐川町〉笛や太鼓、鉦を鳴らし山車を曳くときに唄う。

また、秋祭りの宵、子どもたちは「おばば唄」を唄って村を練り歩き、最後は寺の御本尊にお参りをし解散した。

ハ　〈加茂郡八百津町〉祭の日「だんじり」上の席で、若い衆が笛や太鼓ではやしながら唄う。

ニ　〈揖斐郡藤橋村〉盆踊り唄として唄い踊る。

江戸時代は寺の境内で踊られたが、神仏分離令により、氏神の例祭としてお宮の境内で唄い踊るようになった。

ホ　〈羽島郡柳津町高桑〉八幡神社の祭りの時、太鼓を乗せた台車を引き回し、道の辻々で止め、笛や鉦ではやしながら「おばば」を唄う。

ヘ　〈羽島郡笠松町〉八幡神社の祭礼で、各町内ごとの神輿が神前奉納を終えた後に奏する。それが終わると次の神輿が入るしきたりで、今も固く守られている。

また、その他の祝いごとにおいても、その宴の最後に必ず唄う。

ト　〈羽島郡川島町の渡町〉盂蘭盆恒例行事として、子どもたちが「おばば唄」にのせて元気よく行列を繰り出して村中を練り廻る風習があった。

(2)出産、婚礼、新築などのめでたい席

イ　〈加茂郡八百津町〉誕生した七日目「七夜」は赤飯にお頭付きの魚料理で親戚を招いてお祝いをする。客は女性が多く、宴たけなわになると、「おばば」が唄われ、一升徳利を担いで踊ることもある。中年以上の女性が唄い踊る祝い唄である。

ロ　〈岐阜市〉婚礼の披露宴の終わりには必ず唄う。

宴会のお開きを宣言する代わりに、上座の者が「おばば」を唄い始めると皆が唱和しながら玄関を出ていく。もし宴の途中で唄ったならば、「まだ早い」と叱責が飛ぶ。

ハ　〈関市〉建前の酒宴で、棟梁がお開きという合図として“ういてきたー　ういてきたー”と唄い、皆が席をたった。

(3)酒宴の席

イ　〈美濃・尾張北西部地域〉普通に酒席で唄った。また、芸妓の三味線にもあわせて唄う。

(4)その他

イ　〈揖斐川町〉いもち送りや伊勢参りの出迎えの時に景気付けに唄う。

「おばば」がめでたい宴会の最後に唄われるというしきたりは、笠松町の八幡神社で行なわれた神輿の奉納のしきたりから影響を受けたと思われる。「祭り唄」から「座敷唄」へ移行されてもこのようなしきたりは残されたと推測される。しかし、上記のように各地で唄われた場や状況は時の流れにともない衰微の一途をたどっており、淋しいことである。

5　資料にみる各地域の伝承

祝い唄「おばば」が伝承されされているのは岐阜県の美濃地方の他、隣接する愛知県の北西部である。そこで、両県の市町村史を調べた結果、愛知県の人々は「おばば」は岐阜の民謡という認識が強く、十分な資料が得られなかった。例えば、『愛知県地方の古民謡』（伊奈森太郎著）[9]には真清田神社の祭り唄として「おばば」が記載されているが、関係神社へ照会しても、その近隣の古老に尋ねても「唄われたことはない」という。祭礼の桃花祭についても同様であり、現在では不詳ということである。一人だけ証言が得られたことは、一宮市在住の古老・松本勝二氏88才（1909年生）が「若い頃、酒の席で聞いたことがある」と言うことである。

愛知県の北西部では「おばば唄」は今や殆んど姿を消したといえるのだろう。

それにくらべ岐阜県内では揖斐川町をはじめ、岐阜市、笠松町、八百津町などでは「おばば唄」は伝承され資料も多く残されている。各地の資料を紹介し考察をしたい。

(1)　揖斐川町

揖斐川町では、我が町こそ「おばば」の発祥の地と称し〈末永く大切に伝承していこう〉という気運が強い。当地の教育委員会発刊の小学校副読本には「おばばの歌」として以下の

歌詞で掲載している。続いて、発祥の由縁などが記述されている。

おぉばばどこ行きゃるナーナ　おぉばばどこ行きゃるナー
　三升だるさげて　そうらばえ　ヒュルヒュルヒュー　ドンドンドン
よめのざいしょへナーナ　よめのざいしょへナー
　ささまごだきに　そうらばえ　ヒュルヒュルヒュー　ドンドンドン

文士鈴木三重吉がかって長良川の船遊びをした折、この「おばば唄」を聞き「いい唄だ。節といい、文句といい、ほんとうの古い民謡を聞いたような気がする。」と称賛した[10]。

その「おばば」の唄はこの町から生まれた。

今から四百年あまり前、天正（1573～1592）の頃の話、揖斐城主堀池備中守の姉・まさが房島村善明寺の春浄のもとへ嫁入りをした。まもなく男の子が誕生した。そこで、房島御坊ではおぉばあさまが初孫誕生のお祝いに、酒樽を持って嫁の在所へねぎらいに出かけた。何しろかたや城主、かたや名のある寺院ということで、この祝いごとにあわせて笛や太鼓で行を盛んにして唄われたのがこの「おばば唄」の起こりと伝えている。

古くから行なわれている揖斐祭りは伝統のある祭りで、近くの町村からも人々が集まり、たいへんな賑わいである。三輪神社の神輿がかつぎ出される。一社に数十人の若者が元気のよい掛け声をあげ街筋を練り進む。やがて掛け声は「おばば」の唄に変わり、歌声が山に響き街中に広がり、街は「おばば」の唄につつまれる。ゆえに、この祭りは「おばば祭」とも呼ばれている。

「おばば」の唄がこの町の唄として人々の心に溶け込んでいるあらわれともいえよう。この唄は、その他に家の新築、嫁とり、婿どり、などすべての祝いごとの唄として、西濃はもとより広く県下一般に歌われている。

このよい歌がこの町から生まれたということを忘れないように心にとめて大切にしていきたい。

揖斐川町房島の善明寺から昭和62年（1987）に門徒に出された『おばば唄の発祥』（岩井敬一識）[11]の一文も転載する。

六百年の昔、土岐家の分家として揖斐城を築き、この地方に入部した揖斐氏は連綿七代二百年続いたが、八代五郎光親の代に至って天下は戦国時代の真っ只中で、梟雄斎藤道三の美濃経略を阻む最後の砦となった揖斐城は、主将光親以下の善戦苦闘も及ばず、天文十七年五月（1548）山城諸共陥落敗亡の始末となった。

その時、道三の手下として相当の手柄を認められた堀池備中守氏兼は、新しく揖斐五千貫文の領主となったのであります。

この備中守は、揖斐氏時代の山城を麓に下ろしたり、三輪神社を山麓の現在地に移したり、又、吹元から東流していた揖斐川に堤を築いて東南に流し、城下町揖斐の基礎を造ったりして、相当に領主としての手腕を持っていたのであります。

この殿様の姉のお政の方というのが、当時、西濃で檀家が五・六百もあり指折りの大寺である善明寺春浄院主のもとへ嫁入りました。間もなくお庫裏様御懐妊御出産ということになり、生まれたのが目出度く男の子でありました。一族一門の喜悦は申すに及ばず、早速善明寺おばば様が嫁の在所へ見舞いがてら初孫を抱きにお出かけになり、村ではお祝いの行事がいろいろと催されました。その時、房島の門徒のなかに唄の上手な堤瀬兵衛という爺がいて、この光景を唄にしたてたということであります。

――「おばば」の歌詞　略――

房島では、毎年9月15日、秋祭りの晩、子供達はこの唄を唄いながら村を練り歩き、最後は寺の御本尊にお参りをして解散する習わしは今も続いている。この習わしの起源は明らかでないが、恐らくは、おばば唄と起源を一つにしていると思われる。

上記の資料の他に、「おばば唄」は寛永（1624～1644）の頃まで当地方で流行していた、由の文献があると聞くが原典は不詳であった。『揖斐の古記』[12]にも「おばば祭」に関した内容の記述がある。

享保五年（1720）…略…巾壱間長弐間程の車を拵、其上に巾二尺計長二間計の材木を作り其上に若者上り木遣りを諷ふ。其後ひろひろの唄作りこれを諷ふ…略…

ここでいっている「ひろひろの唄」は実は「おばば」のはやし言葉の部分ではないか、という説がある。古老たちの話では、「おばば」は古来から祭りの時のほか、伊勢の代参迎えや新築祝い、嫁とり・婿とりの祝宴、そして田の神を祈るいもち送りの行列など、景気付けの場で唄った、というものであった。

松岡浩一氏は「おばば唄」が他地域から美濃に伝承された、と主張するひとりである。氏の調査研究[13]では、西国巡礼の最後三十三番目の札所が谷汲山の華厳寺で、諸国巡礼者が持ち込んだのではないか、桑名通いの舟人によって伝えられたのではないか、という意見である。伝承説は他にもあり、治水工事職人によるという意見もある。以上を考察すると、岩井敬一識の房島善明寺説と善明寺年表[14]とでは年代のずれがある。

善明寺年表によると、善明寺4代春浄[15]の子春巧が誕生したのは天文10年（1541）で春浄32歳の時である。ところが、揖斐城陥落は天文17年（1548）でその7年後のこと、さらにその20年後の天正の頃に城主の姉まさが春浄のもとに嫁ぎ、やがて男子誕生、ということであるから年代上からはあわず不自然なことになる。

不自然な点は「おばば」の歌詞の形式上からも指摘できる。七七七五文字の形は（3・4）（4・3）（3・4）（5）の形で構成されている。このような近世調は寛永年間（1629～1644）の頃完成したとされているから、室町期にできあがったとされる「おばば」の唄からみると不自然さは否めないだろう。堤の瀬兵衛が唄にしたてたということであるが、瀬兵衛についての記録も見当らない。

三輪村の古記録に記された享保5年（1720）の項「ひろひろの唄をつくり…」について、

歴史学者日置弥三郎氏[16]は「おばば唄の囃し言葉を意味するものではなく、いろいろの唄をつくり…」と解すべきと述べておられる。

以上のような記録から推察できることは、「おばば」の発祥地が現揖斐川町とすることに無理があるのではなかろうか。日置氏の指摘された「ひ」の音は旧仮名遣いや古い日本語の発音では当たり前のことであり、松岡氏の指摘・川伝いから伝承もという意見も当時の社会状況として巡礼街道の終点ともなる揖斐川町ではありうることだからである。こうしたことから「おばば」は江戸時代後期あたりに揖斐川町に伝えられたと考えられる。そして大正・昭和時代の前半頃までは美濃地方の各地で盛んに唄われていたが、現在はほとんど唄われなくなってしまった。時代や生活の変化が大きく影響していると思われる。

とはいえ、揖斐川町一帯では「おばば」に関する言い伝えを尊重している。ちなみに、平成3年（1991）に房島街道の「すももの木の橋」のたもとには「おばば」の歌詞とその由来を記した碑文と「民謡　おばば発祥の地」と彫り込んだ石碑が建立されている。さらに、揖斐川町名物として「おばば樽もなか」や「清酒揖斐まつりおばば」なども登場する今日である。平成5年（1993）にはオペレッタ「おばば」も制作上演されている。5月の揖斐祭りでは神輿をつったり山車を曳く時に「おばば」を唄いながら三輪神社へ奉納し、8月8日の夏祭りには「おばば踊り」を繰り広げている。鈴木三重吉のエピソードなども一役買って、この唄に対する思いがいっそう熱くなったのであろう。町をあげてこの唄を育み、後世に伝えていこうという揖斐川町の企画に諸手をあげて賛同したい。

(2)　岐阜市

大正8年（1919）脱稿、昭和3年（1928）発行の『岐阜市史』[18]に「岐阜に因める歌謡」として次の4節が掲載されている。

“岐阜はよいとこ　金華山の麓　小田の蛙が　寝てきける”
“岐阜の本町　広い様でもせばい　横に車が　二挺たたん”
“岐阜の本町　米屋の娘　赤い襷で　米はかる”
“岐阜の大佛　振袖着せて　奈良の大佛　婿にとる”

この4節の詞のうち2節目からは後から追加されたものである。ここには「おばば」は掲載されていない。この後、岐阜市の観光・鵜飼いの宣伝のために作られた「岐阜音頭」が続くのである。井出蕉雨氏[19]作詞、節調杵屋喜多六氏、振付け西川石松氏で、三味線にのせて唄う曲である。『新曲長唄岐阜のなどころ』（昭和3年・1928刊行）、『岐阜花街案内』（昭和11年・1936）に掲載されている。ところが「おばば唄」は『岐阜花街案内』の「岐阜音頭」の項ではなく、「俚謡」の項に以下の歌詞で掲載されている。

「俚謡・おばば」

お婆何處へ行きやるナーアナア、
　お婆何處行きやるナー、
　　三升樽提げてソーラバエー、
　　ヒュルヒュルヒュー、ヒュルヒュルヒュ。
嫁の在所へナーアナア、
　嫁の在所へナー、
　　ササ孫抱きにソーラバエー
　　ヒュルヒュルヒュー、ヒュルヒュルヒュ。
岐阜はよいところぢやナーアナア、
　岐阜ははよいところぢやナー、
　　金華山の麓ソーラバエー
　　ヒュルヒュルヒュー、ヒュルヒュルヒュ。
小田の蛙がナーアナア、
　小田の蛙がナー、
　　寐ちょっても聞けるソーラバエー
　　ヒュルヒュルヒュー、ヒュルヒュルヒュ。

「岐阜音頭」

岐阜はよいとこ金華山の麓、小田の蛙が寐て聞ける。
岐阜の本町廣い様でもせばい、横に車が二挺たたん。
岐阜の本町米屋の娘赤い襷で米はかる。
岐阜の大佛に振袖着せて、奈良の大佛聟にとる。
四季の風情は金華の眺め、花もさき候月雪も。
篠ケ谷戸出る鶯の、初音嬉しき梅林。
聞いて伊奈波の櫻の盛り、訪ふて見よかし花の春。
二人揃ふて二重の堤、櫻見に行くおもしろさ。
掬ふ御手洗澄む池水に、映る蛍火ちらちらと。
名さへ高富飛び交ふ蛍、玉の光の石田川。
君が御料のあゆ漁る手業、ほかにながらの鵜飼船。
君に捧ぐる鵜飼の香魚は、御代と長良の川育ち。
鵜船来る来る操る手縄にも、見ゆる鵜匠の腕のさえ。
景色よい暗墨絵の川に、散らす篝の金砂子。
空をあかねに船伏山の、峡を暈して鵜の篝。
岐阜の長良の川風涼し、鵜飼見がてら船遊散。
小田の蛙が寐ちょっても聞ける、岐阜の長良の納涼臺。

前記の2曲には同じ詞を使った箇所がある。“岐阜はよいとこ　金華山の麓　～”である。「おばば」にこの詞が取り込まれた経緯について、岐阜市長森高田に在住の詩人・岩間純氏（当時86才）から昭和60年（1985）に聞いた話によると、“岐阜はよいとこじゃ～”の歌詞は、近世畸人伝に登場する人物で徳川尾張公に出仕していた、小野お通[20]の作で、伊奈波神社の古文書に記録されている、ということであった。現在でも、岐阜市を含む近辺の人々の多くは前述のような歌詞から「おばば唄を岐阜市の民謡」と思っているが、「おばば」は岐阜市で生まれたものではないと断言できる。

昭和の初期には三味線の伴奏で唄う「岐阜音頭」と三味線の伴奏なしで唄う「俚謡・おばば」とをはっきり区別していた。『日本民謡事典』[21]にもこのあたりの事情について明記している。

> 岐阜市では、地元の唄として普及すべく井出蕉雨氏に委嘱して新歌詞を作り、「岐阜音頭」の名で近年世間にひろめている。古調の「おばば」は唄い出しの文句をとって「おばばどこへいく」などともよぶ

これらの資料や状況から考えられることは、昭和初期には美濃地方一帯で「おばば」が広く唄われていたために、岐阜市の唄と限定できるわけでもなく、岐阜市史に「おばば」の歌詞を掲載できなかったのではなかろうか。

しかし、その後芸妓たちが「座敷唄」として「俚謡・おばば」と「岐阜音頭」を三味線にのせて一緒に唄い流布するにつれて岐阜市の民謡と思い込まれていったと推測される。“金華山～”とか“小田（織田）の蛙～”など岐阜の歴史にまつわる歌詞や“岐阜の本町～”といった地名などにはいっそうの親近感を抱いたであろうし、鵜飼い宣伝のために新しく作られた

「岐阜音頭」がレコードやラジオで盛んに流されていたことも要因の一であろう。

このことは、それ以後に出版された民謡関係の本にも混乱して記載されている。「おばば(岐阜音頭)」や「おばば＝岐阜音頭」という表記の活字を目にすれば、“「おばば」は岐阜の民謡”と多くの人々は誤解してしまうのではなかろうか。

近隣の「村史」や「町史」でもこの誤解を指摘している。本巣郡北方町の『北方町史』の中で、「昔からおばばの唄はこの辺りの唄であったそうだ。それが、現在では岐阜（市）の唄になってしまった」と記述されている。また、羽島郡川島町の『川島町史』でも「古老曰く、おばばは古くから笠松が発祥で、明治維新となり笠松陣屋が廃止され、笠松県庁が岐阜に移転すると、いつとはなしに唄も岐阜に伝わっていってしまった」と記されている。当時はもちろん岐阜市でも唄っていたのだが、それだからといって岐阜市の民謡と限定して表現するのは望ましくない。

もう一点は岩間氏の指摘である。氏の“岐阜は[22]よいところじゃ、金華山[23]の麓、小田の蛙[24]が小野お通作詞者説に疑問を抱き、本人に確認すべく訪問したが、すでに故人となられており確かめられなかった。

また、伊奈波神社にも問い合せたが、そのような古文書は見当らない、という返事を頂いた。岩間氏のいう小野お通は寛永８年（1631）に64才で亡くなっている。近世調の唄の形式が確立したとされている寛永年間はお通の晩年で接点があるが、それだけでは立証は弱いのではなかろうか。その娘、２代目お通は真田家へ嫁し、延宝７年（1679）亡くなっているが、唄の制作話や、徳川尾張公との関わり、岐阜へ立ち寄った、などの記録も発見されていない。岩間氏の説には疑問が残るといえよう。

しかし、『岐阜志略』[25]の中には「尾張藩主岐阜城御成りに関する記述」という一文があり、同一の内容が葉栗郡北方村加藤家文書にも存在している。その内容とは、７代宗春は享保18年（1733）９月11日に、８代宗勝は延享４年（1743）９月２日に、９代宗睦は安永６年（1777）９月19日に、12代斉荘は天保14年（1843）９月21日と、それぞれ岐阜へ来訪、鵜飼い見物をして宿泊、翌日は「大網」「ていな」など釣りを見て楽しみ、その後に金華山へ登った、と記されている。いずれの場合も多くのお供を従えたようで、天保14年の時は1500人のお供人と記録されている。長良川や金華山周辺を眺め、供人の中には、この岐阜を“よいとこ、金華山の麓、小田の蛙が寝て聞ける”と唄を作ってもおかしくはない。このあたりの史実についても後日じっくりと調査したいと考えている。

(3)　八百津町

八百津町では、前述したように子どもが誕生して七日目を「七夜」といい、赤飯にお頭付きの魚で親戚を招きお祝いをした。客は主に女性が多く宴もたけなわになると「おばば」が唄われ、中には一升徳利を担いで唄に合わせて踊る者も出てきたりと、にぎやかな祝宴がくりひろげられたようである。

この七夜の祝いは、かっては全国的に広く行なわれていたが、現在ではあまり行なわれなくなったようである。県内でも、この七夜に「おばば」を唄うという地域はあまり聞かない。だが、八百津町ではこの古い習慣を今も受け継いで行なわれている。「おばば」の歌詞そのものは孫を祝う内容で、「孫祝い唄」とも「孫抱き唄」とも「おぼこ祝い唄」ともいわれる。

八百津町と似た七夜の祝い事は青森県でも行なわれている。

八戸を中心とした三戸郡地方では、赤子誕生の七日目に、近親の女性を招き祝宴を開く。生まれた子には着物を着せ、膳に石と葱を添える。これは、石のように堅く育ち葱のように何枚も着物を重ねて着られるようにとの呪い（まじない）である。この日、実家の母親は子供の着物と酒を持って会いに来る[26]と『日本民謡大観』に紹介されている。そして、その時の唄は地域によって異なるが、「銭吹き唄」の旋律にのせて次のように唄われている。

「おぼこ祝い唄」…“今日のおぼこは　よいおぼこだナイ　ソロトヤーイ”
“ばばさむすサョイ　二升樽さげて　何こさ行く
嫁御のお里さ　　孫抱きに　ハドイドイ”

興味深い点は、岐阜と青森では遠く離れていても七夜の祝宴がよく似た方法で行なわれていることである。寒い地方だからこそ子供に暖かくして育てたいという願いで「葱をそえる」などという呪いをするが、孫の誕生と成長を心から望む気持ちは共通するものだと感じる。そして「おばば」がそれにふさわしい唄であると再確認をした。

(4)　笠松町

この町には「おばば唄」に関して古くから多くの資料や情報が存在する。主なものだけを取りあげることにした。

笠松町在住の高島英一氏（大正9年・1920生）が亡くなられた父親から聞かされていた話に「おばば」を唄う場面がある。

昔、殿様がこの木戸を通られる時は笠松の代官様が近郷近在の庄屋宛てにおふれを出して人々を集め、道に毛槍を並べてお迎えした。そして、その後皆で「おばば」の唄を唄ったというのである。

笠松町に隣接する川島町の町史にはこんな記録がある。

「おばば」は江戸時代から笠松近在の村々に伝わる民謡で、川島でも一般に広く唄われ親しまれてきた。藩政時代、拾万石笠松陣屋の威勢のよさと民情の豊かさを素朴に表現した唄で、今に「目出度囃子」として盛んに唄われている。笠松祭りに「神輿おばば」の出し物が毎年繰り出され人気を呼んでいる。また、尾張北方陣屋下（対岸）でも今に唄われ継がれている。

渡町（川島町）では、盂蘭盆恒例行事として、子供たちが「おばば唄」に乗せて元気よく行列を繰り出して村中を練り回る風習があった。この「おばば唄」の発祥について明らかでないが、古老曰く「おばばは古くから笠松が発祥で、明治維新となり笠松陣屋

が廃止されて笠松県庁が岐阜に移転すると、いつとはなしに唄も岐阜に伝わってしまった。

そして、「おばば」の元唱1として次の歌詞が記載され、解説がつけられている。

"美濃の笠松ナーナナ　美濃の笠松ナー　お陣屋どころ　ソウラバエー
ボボ車(シャ)ボンボの音(ネ)はナーナナ　ボボ車ボンボの音はナー　江戸まで届け　ソウラバエー"

笠松陣屋十万石と治世のよさを太鼓の音にのせて、江戸の上方まで響きわたらせようとする意味を表している。ボボ車とは、ボンボンと勇ましい太鼓の鳴り響く神輿のことで、ボンボンをボボとなまったものであろう。

このボボ車については、上柳川町の松本堆氏から詳細な説明を受け、所蔵してある実物も拝見することができた。

上柳川町のボボ車は、昭和の始めに宮地（江戸時代の町名）の東宮町から譲り受けたもので、太鼓の内部には明治17年と記されていたという。この明治17年というのは太鼓の傷みがひどくなったので修理した年の記録という。旧宮地の東宮町・西宮町などでは明治以前からボボ車をもっていたが、昭和の始めに本神輿（黒漆塗りに金具をちりばめた高価なもの）を購入したので、上柳川町がボボ車とチョウサイを譲り受けたという話である。

明治17年（1884）から現在までの年数は113年、太鼓を打ち続けられてきたのだが、まだ使えそうだと松本氏は判断されている。この種の太鼓の耐用年数は判然としていないが、また使い方や頻度によっても異なるのであるが、およそ120年位打ち鳴らされてきたことになる。太鼓の寿命という点からの一つの推測ではあるが、明治17年に修理をしたのであればその以前の120年間が使用に耐える期間で、宝暦から明和（1764～1772）の頃にボボ車が存在し「おばば唄」も唄われていたといえるのかも知れない。

現在、笠松町では約40町内あるが、その内でボホ車とチョウサイを持っていて祭りに参加している町内は4町内を数える程度だという。というのもそれらの維持管理が難しいこと、祭りには多くの人手が必要である、などから少なくなってしまったと語っておられた。

ボボ車という太鼓は普通の太鼓と違って、胴は繰り抜きではなく桶のように何枚かの板をたがで締めて造られている。太鼓の皮は鋲で留めるといった形ではなく、麻縄で両側の皮を引っ張って締める。そのため、叩くとやや空気がもれるようで、ドンドンとは響かず、ボンボンという音になる。それで、唄のことばのように「ボンボの音」という表現になったのであろう。肩にかつぐための二本の棒の上に太鼓を乗せる。その上には立方体の箱が乗せられるが、箱の横の4面には「祝」や「奉納」の文字のほか「おかめ」なども描かれる。さらにその上に御弊と同じように切った紙を先に付けた棒を交差させて取り付ける。（写真1参照）現在ではこのボボ車のことを普通オババと呼んでいる。「もうじきおばばがくるぞ」などといっているが、若い人たちはボボ車といっても知らない者が多くなったと話されていた。

祭りの日、町内をつってでる時から「おばば」を唄いながら八幡神社へ行くが、チョウサイ(花神輿のこと・写真3参照)がすでに中に入り練っている時などは他の町内の神輿が入らないように入り口にボボ車を留めて、「おばば」を唄って待つ。

やがて終宴に近づくと、大きいチョウサイ(本花)の上に中位のチョウサイ(中花)を乗せ、続いてさらにその上に小さいチョウサイ(子供花みこし)を乗せる。この三つが組み終わるとボボ車を中に入れ、大きいチョウサイの上に乗せ、「おばば」を唄いながら奉納する。(写真2参照)そして、唄い終った後は順に取り外して神社から出ていく。その時、ぼん天が出てもボボ車が境内を出ない内は他の町内の神輿・ボボ車などは入ってはいけないことになっている。

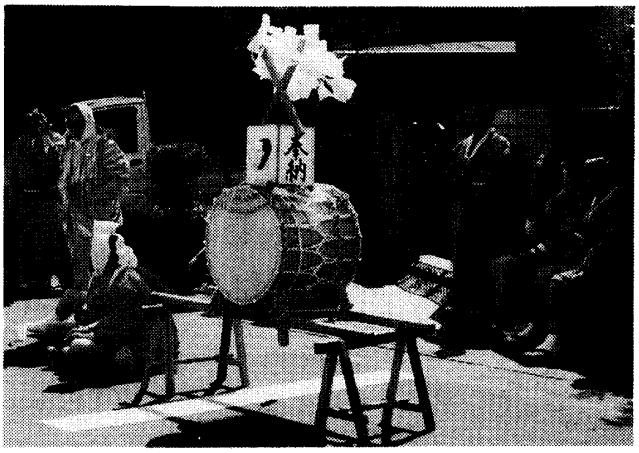


写真1　休憩しているボボ車、通称「おばば」

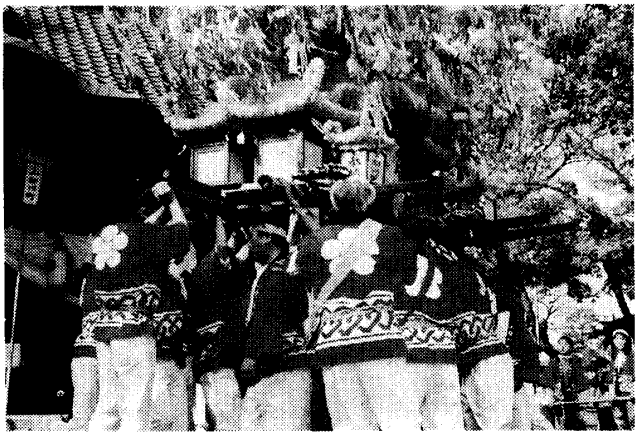


写真2　大中小のチョウサイとボボ車を組み合わせて奉納している所

上柳川町のチョウサイを拝見したが、住民の手作りだそうだ。本神輿と同じ形の白木作りであり、ちょうど立方体の上に屋根をのせた形をしている。その立方体の横の四面は障子戸をはめ込んだようにな感じで、屋根は格子状に組み立てる。屋根の一番上に柳の枝を数本差し込み、その柳に短冊などを吊して飾る。また屋根は、白い花びらの形を型で抜き、周りを桃色に塗り真ん中に赤く染めた花芯をいれた花を隙間なく張りつける。夜になってチョウサイの中に蠟燭をいれると、光が花にあたってとてもきれいな花神輿となる。チョウサイは昔から伝えられている農民の手作りの神輿である。花だけが毎年作り替えられる。また、チョウサイは肩に担いで練り歩くのではなく、担架を運ぶように腰でしっかりと支えていくのだという。

笠松公民館長の森晟二氏談によると、ボボ車とチョウサイは一体で、チョウサイといったらボボ車も一緒についてくることになっている。それは、ボボ車に清めの意味が込められているのだという。ボボ車は、チョウサイの後からつかず離れず3・4間の間隔をおいて付いていく。もし、なにかであまり離れてしまった場合にはチョウサイが迎えに来たこともあっ

た、という。さらに、ボボ車は一切後ずさりすることは許されず、また真っすぐに進むのでもなく、左や右に移動して進んでいく習わしである。そのため、前後に警護の人がついて安全に気を配っていくのだという。

ボボ車をつる人たちは町内から選ばれる。まずお神酒を受けて道中を回らなければならないので酒の強い人、次には右や左に面白おかしく動き回らねばならないので剽軽な人、といった基準で選定されるという。ボボ車の後には、ボボ車をつる人に飲ませる酒をかつぐ一群が続くのである。

ボボ車は、太鼓のボンボンの音からきているので本来はボンボン車であろう、と前に触れたが、ボボ車の「車」について述べる。

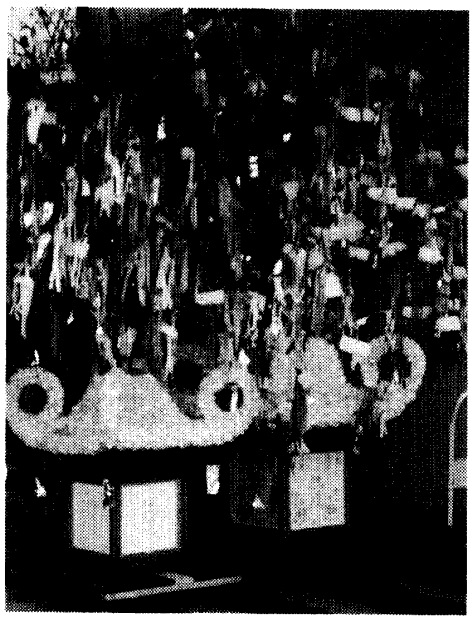


写真3　チョウサイ（通称花みこし）

ボボ車という言葉は江戸時代からあった。江戸時代には言葉どおりにおそらく車輪が付けられていて、曳いたのであろうと推測される。現在のボボ車は肩に担ぐ形である。

ところが本研究の調査をしていて、隣村の高桑に写真4の台車を使ったボボ車を発見した。高桑村では、江戸時代、200年前からこの台車を使って太鼓を叩いていた、という記録がしっかり残っていた。

高桑在住の堀川好文氏によると、車輪の形・作り方は200年前と同じだという。ただし太鼓を乗せる台木が現在のような直線の交差でなく、もっと太鼓を包むような曲線であった。また、太鼓も昔のものとは異なり近年作の太鼓を使用していると語っておられた。

現在のような肩に担ぐ方法であったとしたら「ボボ車」とは名付けられなかったと考える。

『笠松町史　下巻』や『ふるさと笠松』には次のような記述がある。

> 笠松三郷鎮座の八幡社ならびに天王社の例祭は、従来8月14・15日に執行された。弘化2年（1845）の祭礼には、本楽の15日に郡代柴田善之丞も参詣し、初穂料金500疋を奉納した（『庄屋記録』より）。しかし、これは特例で両社の例祭には、郡代は

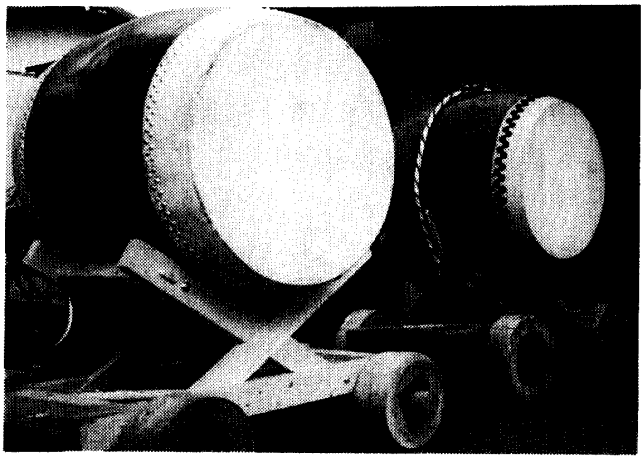


写真4　高桑の台車

金100疋、その他役所一統として金50疋を奉納するしきたり（『郡代引継文書』より）であった。まず、14日の試楽に陣屋から手代・足軽などが出張してきて神事が行なわれた後、夕刻から宮地町のテウサイ（チョウサイ）が陣屋内に入り、御役所町を祭一色に塗りつぶした。

とある。これより10年程さかのぼる資料にチョウサイを「雨乞い」踊りに使用したという記録がある。

天保３年（1832）、笠松地方では６月18日から照り始め７月に入ってからも一滴の雨も降らなかった。各村々ではさまざまな雨乞いを実施していた。笠松村では、八幡・天王の両社へ手分けして百度参りをし、百度参りが終わった時、「調才踊り」をした。

と記述され、対岸の尾張北方陣屋下郷宿の留書にも「笠松は調才踊り」とあり、「どんな踊りであるか詳らかではないが、雨乞いの後には'調才踊り'が催されたのである」と記されている。

前述した高島英一氏が父親から聞かされていたという木戸の話などから「おばば」について考察したい。笠松三郷に木戸が新設されたのは幕末のことで、勤王・佐幕の両派に分かれて物情騒然としていた文久年間（1861～1863）であり、参勤交代の殿様が笠松の木戸を通過される時、笠松郡代の指示で美濃一円の庄屋が集められた。そしてその後に'おばばを唄った'ということは'大名行列の一行をおばばの唄で見送った'ということではなかろうか。人々は一生懸命唄い、これを聞いたまわりの人々も快く受けとめたと思われる。このような事情が「おばば」の伝播におおきく関わりをもっていると推測される。

『川島町史』および『神輿おばば（笠松公民館発行）』[27]に記載されている詞"ボボ車ボンボの音はナーナナ　ボボ車ボンボの音はナー　江戸までとどけ　そうらばえ"とあるが、'江戸'という言葉は、「おばば」の唄が明治以前の江戸時代に作られ唄われていた証といえるのではなかろうか。

また、弘化２年（1845）の祭礼に宮地町のチョウサイが陣屋内に入り、御役所町を祭一色に塗りつぶした、という記述は、前述したようにチョウサイはボボ車と一体のもので、チョウサイが陣屋に入ればボボ車も一緒に入り、「おばば」を唄いながら清めていったと考えられる。さらに、『笠松町史』などに書かれた天保３年（1832）の「雨乞い」のために百度参りをし、その最後に踊る踊りが'調才踊り'ということが、大きな意味をもつようになった、と思われる。すなわち、祝いごとの祝宴でもう最後・しめくくりというのは人が決めるのではなく、なにか大きな力による、といったような重みが込められているように思う。そのことが誕生や婚礼や新築などの宴に取り入れられるようになったのではなかろうか。

'調才踊り'については実態が不詳という記録になっているが、前述の「はやし言葉⑨…根尾村」からもう少し考察してみたい。

この唄は、昭和47年（1972）に林友男氏[28]が根尾村在住の洞口福太郎氏、当時81才（1892生）から採録したものである。

“おばばどこ行きゃるナーナナ　おばばどこ行きゃるナー　三升樽さげて　ソオンダモエー
嫁のざいしょへナーナナ　嫁のざいしょへナー　アレワイ　孫だきに　ソオンダモエー
アラ　チョウサイじゃ　チョウサイじゃー”

この“チョウサイじゃ”の意味がよく解らず疑問をもっていたが、天保3年の「雨乞い」の資料に出会って糸口をつかんだ。つまり、笠松の郡代から召集された庄屋や村役人の中には根尾村の人も入っていたことは十分考えられる。そして、この時に「おばば」を聞き覚えて帰り村人に伝えたのではなかろうか。根尾村でも雨乞いをしなければならないといった自然災害を受けているはずだからである。

なお、洞口福太郎氏は今は故人となられたが、現在根尾村在住の民謡の研究者畑中正一氏（元校長で1914生）83才がおられる。畑中氏は「ずっと以前にこの根尾村でも“チョウサイじゃ”のはやし言葉をつけて唄っていた人が洞口氏のほかにもいた。しかし、‘おばば’は根尾の唄ではない」と明言しておられる。今後もこの点に関した資料を調べたい。

6　考察をまとめて

各地の「おばば」の歌詞や伝承の姿、史実などを調べ、「おばば唄」の発祥の時期とその地について考察をしてきた。まだ資料などの点で不足している部分もあるが、ひとつの結論に到達できたと考えている。

イ．発祥の時期

「おばば」の起源は天保年間（1830～1844）、すなわちさかのぼること160年ほど前のことと推測される。江戸時代という一つの時代が終わろうという晩年のことと考える。婆が三升樽を持って嫁の在所へ孫の顔を見にゆく、抱きにゆくというような豊かさはやはり江戸文化、農民も含めて庶民の文化が円熟してきたからこそ生まれたのではなかろうか。

参勤交代で通過する大名を見送ったあとに、この地の豊かさを唄う、それは子どもの誕生であり、年寄までも元気で、しかも三升樽を持って歩ける健康さ、そんな祝儀をだせるという願いからこの唄が生まれたのではないだろうか。そして「雨乞い」をし、この豊かさを美濃の地にもたらせて欲しい、そんな農民が願いをこめて唄い踊ったのではないかと思われる。

ロ．発祥地

次に、「おばば唄」の発祥地は美濃郡代がいる陣屋の置かれていた笠松三郷と考える。

その根拠の一番目にあげられることは笠松が美濃国の行政の中心地であったことによる。

幕府直轄地を支配する陣屋が笠松に置かれたのは1662年（寛文2年）のこと、1868年（慶応4年）に明治政府に接収されるまでの200年余の間美濃郡代が統治し、笠松が美濃の行政の中心地となっていた。明治時代に入ると、笠松県となり笠松県庁と呼称が変わったが、1873年（明治6年）岐阜に移転するまで県庁の所在地・行政の中心地であった。

ちなみに、幕府直轄の陣屋があったのは、江戸、高山、笠松　日田（大分県）の全国でこの4箇所だけである。陣屋が置かれていたということは、この笠松が美濃の地で重要な意味を持っていたこと、安全な土地であり政治の中心であったことを意味している。

美濃は旗本領や私領などが細かく入り組んだ諸代官による支配地であったが、享保の改革で美濃郡代一本の所管に改められた。美濃国一帯の指示は美濃郡代に委ねられ、庄屋や村役人は事あるごとに笠松に足をはこんだのである。「おばば唄」はこのような歴史的地理的背景のもとに生まれ、伝承されていったと考えている。

ハ．伝　播

伝播されたのは船の運航路にそってではないか、ということである。

笠松陣屋の近くには尾張藩の北方川並奉行（愛知県側）と円城寺川並奉行（岐阜県側）が置かれていた。木曽川を上り下りする舟の取り締まり川の管理をすると同時に民政も行なっていた。天保2年（1782）の記録に、北方陣屋の管轄は木曽川沿いの葉栗・丹羽・中島の3郡と美濃の大野・池田・本巣ほか9郡に及んだ、とある。

また、笠松から木曽川上流の川辺・兼山・錦織（八百津）の川湊へは頻繁に舟が通い、下流の方面では尾張北西部の川湊を経て桑名まで往来していた。そして長良川や揖斐川にも舟の往来は行なわれていた。舟上だからこそ、水面にゆられながら「おばば唄」がつい口をついてでたのであり、聞く人々がめでたい唄、よい唄と自国に伝承させたと思われる。

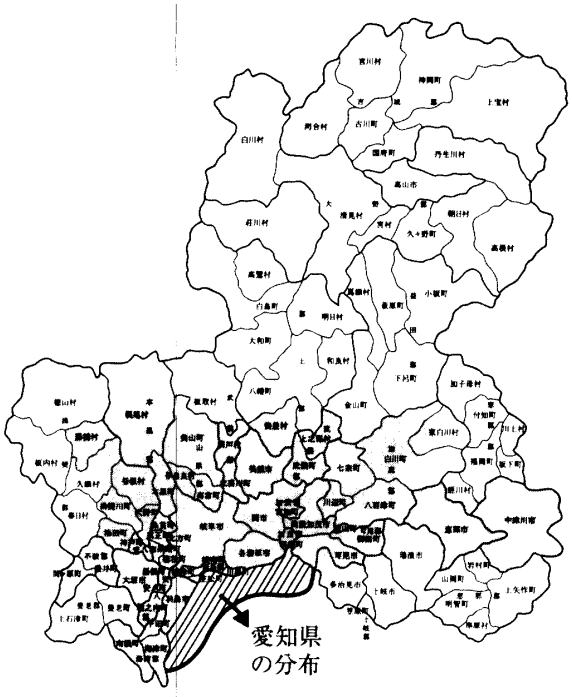
愛知県側では、木曽川に接している犬山から下流の各地域に「おばば唄」の伝播がみられる。このことは、笠松が当時舟の運航や運材の管理・取り締まりに関わる最大の川湊であったことを物語っている。笠松を中心に木曽川を上下した当時の様子が次の地図で推察できる。

また、笠松が陸上での物資の集散地であり、人の往来が盛んで文化の伝播が容易であったことが推測できる。

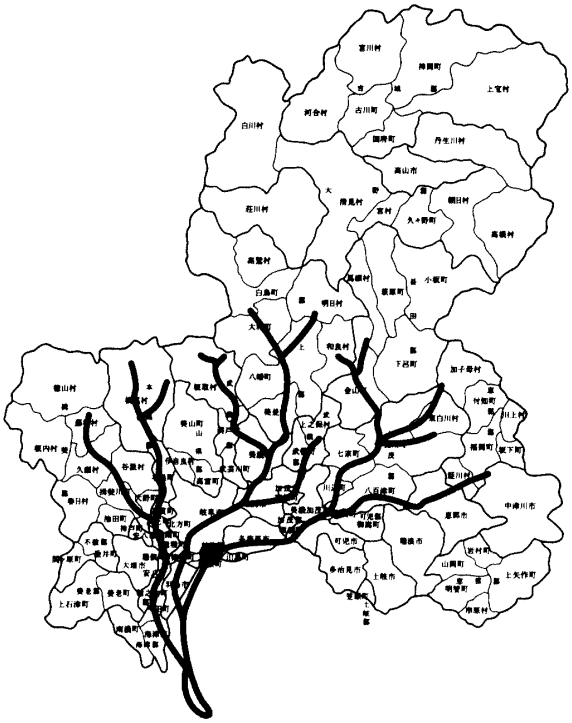
先の水路に対し陸路でも笠松は要所であったことがあげられる。古くから「献上鮎」や「献上真桑瓜」といった記録があり、特産品の通り道で、継ぎ問屋が置かれていた。郡上藩主の江戸参勤をはじめ各藩の大名、旗本、東・西本願寺門跡などの往来記録が残されており、その都度、美濃郡代から指示が各村へ出されて多くの人が集められている。

また、当地では月6回開く六斉市が古くから開かれており、各地から多数の人がやってきていた。天保の頃（1830～1844）には美濃縞の生産も盛んであった、という記述もあり、当時の笠松では人々の往来がかなり烈しかったことがわかる。

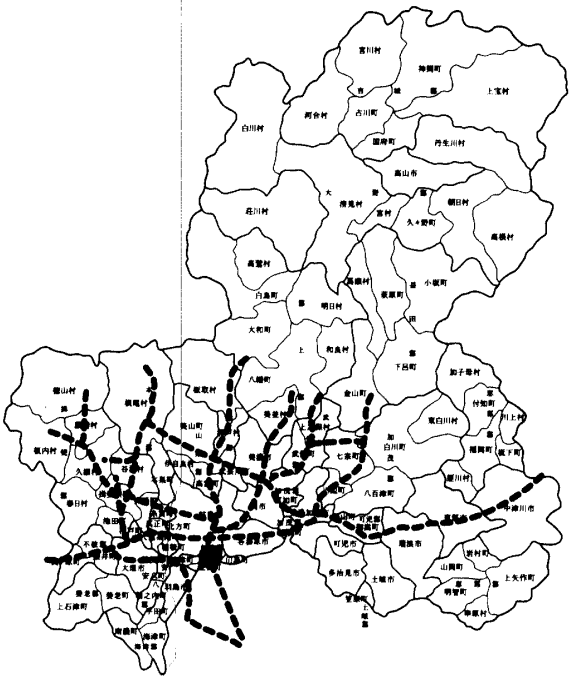
このように、笠松は美濃国の行政、河川、街道の中心であったから、美濃郡代の膝元である笠松三郷の祭りや8月14・15日の八幡神社および産霊神社の例祭には美濃一帯はもちろんのこと、対岸の尾張地域からも多数の参詣者があったと推察される。そこではチョウサイやボボ車が出て「おばば唄」が大いに唄われ、人々はそれを聞き覚えて帰っていったのだろう。そして、中山道をはじめ街道の宿場沿いに「おばば」が伝播し広められていったと考える。



地図1　「おばば唄」の分布図



地図2　美濃地域の河川



地図3　美濃地域の街道

地図4　県内の各市町村

以上、いろいろ述べてきたが「おばば唄」を笠松の発祥であるとする一番の大きな根拠は、「おばば唄」の歌詞の中にある“どこ行きゃる”である。

“おばばどこ行きゃるナー”の「きゃる」は笠松地域のことばである。『笠松町史』の532頁に笠松の方言として「いきゃあす（行きなさる）」と例を掲げている。歴史的にみると、天正年間（1573～1592）の木曽川氾濫で川筋が変更するまでは、笠松は尾張藩であった。現在も尾張との境に位置していて、尾張弁がかなり混入しているし、関西系の訛りも入り交じっている。こうした民謡はその地元の言葉で唄われるものであり、たとえ他国から伝承された唄でも、やがてはその土地言葉に変化してしまうのである。鹿児島では“おばばどこいっけ”、青森県では“ばばさむす　どごへいぐ”などとなっている。笠松では“おばばどこ行きゃる”と唄うのだがこの言葉は紛れもなく尾張訛りであり、笠松が尾張地方の一地域であったからこそ歌詞に使われているのだろう。

以上のように笠松には「おばば」発祥の地というにふさわしい強い要素を多く持っているといえるのではなかろうか。

7 おわりに

この「おばば」の調査研究は10数年前から追求してきた課題である。

今回は、唄のことばを中心に、この民謡の発祥と伝播の過程について考察してきた。次回は旋律の面から考察をすすめたいと考えている。時代の推移とともに旋律がどのように変化してきたか、地域でどのような特徴や差異が現われているか、などについて述べたいと考えている。

最後に、文中で御芳名をあげさせていただきましたが、本研究にご協力をいただき、資料などを提供してくださいました方々に心から謝辞を申し述べます。

さらに、前岐阜市歴史博物館長の加納宏幸氏、本学の野々村千恵子助教授に適切なアドバイスをいただき、ここにまとめることができました。厚くお礼を申しあげます。

註

1　小寺玉晃編『小唄のちまた』1826～1858の間に名古屋で流行した歌詞集
2　浅野建二『日本の民謡』岩波新書　1960　P.100
3　畠山兼人編『民謡新辞典』明治書院　1979　P.181
4　『笠松町史　下巻』1957　pp502～503　『ふるさと笠松』1983　P.20、P.330
5　『ふるさと笠松』1983　P.326　『笠松町史　下巻』1957　P.469
6　揖斐郡池田町宮地在住　美濃民俗文化の会会員　坂内村史編集主任
7　揖斐郡藤橋村東横山在住　勝善寺住職
8　長田暁二『岐阜県の民謡』曲目解説　1987　P.239
9　伊奈森太郎『愛知県地方の古民謡』1954

10　川口半平『作文教育変遷史』第14章　赤い鳥の綴り方岐阜県国語教育研究会　1958
11　揖斐川町黒田在住　永年小学校長として奉職　町文化財審議委員長
12　三輪神社所蔵『三輪村古記録』享保５年頃　1704～1710成
13　美濃民俗文化の会編『美濃民俗』316号　1993
14　揖斐川町房島御坊光耀山善明寺本堂落慶法要記念誌　1984年５月　P.14
15　同上誌 P.14に空浄とあるのは春浄の誤りであることを現住職に確認をとった
16　日置弥三郎執筆『岐阜県指定文化財調査報告書』第13巻　県教育委員会　1970
17　松岡浩一執筆　『美濃民俗』324号　1993
18　土岐琴川（龍雲）・仙石保吉編『岐阜市史』1919　脱稿その後改訂再編　1928
19　井出今滋師範中学校長　1878　華陽学校校長　1881　元県一等属
20　小野お通は永禄11年（1568）生、寛永８年（1631）64歳で没
　２代目お通は出年不詳、真田家に嫁し延宝７年（1679）没
21　仲井幸二郎・丸山忍・三隅治雄『日本民俗辞典』東京堂出版　1972　P.89
22　永禄10年９月稲葉城（井口城）陥落後、織田信長は尾張政秀寺の澤彦和尚の進言により中国の故事にならい当地を岐阜と改称。『安土創業録』『岐阜県地名大辞典』
23　金華山の名は、室町中期明応８年（1499）に東陽英朝が描いた土岐成頼の自画像（端龍寺所蔵）の賛に見られるし、その後の記録では桃山～江戸初期、竹中半兵衛金華山城を奪うと史書にある
24　長良川の河鹿は、土人称して織田の蛙という。慶長５年８月織田中納言秀信が没落の時に、多くの侍女共が長良川に投じて死んだ。その霊が化して蛙になった。故にその声が如何にも悽愴であると。また一説に、関ケ原合戦直前の岐阜城落城の際、金華山の御手洗池に身を投じ河鹿に変わった女人たちの声といっている。当時、御手洗池は長良川と接していて深い淵を作っていたという。
　『美濃国故実集』によると、織田信長はそれ以前の岐阜城在城の当時、山城国井手の蛙をここに移した、という。
25　松井秀雲『岐阜志略』延享年間（1744　～1747）
26　日本放送協会編『日本民謡大観』東北篇青森県　P.25
27　笠松町公民館『神輿おばば』1974　P.3
28　林友男　元岐阜大学附属小学校副校長　東海女子短期大学非常勤講師『岐阜県のわらべ唄いまむかし』などの著書あり
29　笠松三郷とは、笠松村、徳田新田、田代村の柳原をいう

参　考　文　献

浅野建二『日本の民謡』岩波新書　1960
前田林外編『日本民謡全集』本郷書院　1907
小寺玉晃『小歌志彙集』1848
小寺玉晃（1800～1878）『小唄のちまた』寛永年間
揖斐川町教育委員会『小学校社会科副読本』
岩井敬一識『おばば唄の発祥』房島上善明寺
庄屋杉島嘉兵衛『三輪村古記録』

揖斐川町教育委員会『揖斐川町指定文化財調査書』第1集1969
美濃民俗文化の会編『美濃民俗』310～313号,315号～317号、319号、323号～325号
仙石保吉・土岐琴川編『岐阜市史』1928、1981
『新曲長唄岐阜のなどころ』1928
『岐阜花街案内』1936
仲井幸二郎・丸山忍・三隅治雄『日本民謡辞典』東京堂出版　1972
藤田徳太郎『日本歌謡の研究』厚生閣版　1940
浅野建二編『日本民謡大辞典』雄山閣
伊藤実臣『美濃明細記』1738
伴蒿蹊『近世畸人』1790
小椋一葉『小野お通』風景社　1990
間宮宗好『美濃雑事記』一信社　1816
村瀬茂七『斎藤道三と稲葉山城史』雄山閣　1973
岐阜県教育委員会『濃飛偉人伝』1933
横山民謡保存会編『郷土民謡集』1965
長田暁二・千藤幸蔵編『岐阜県民謡集』日本大衆音楽文化協会　1987
『季刊邦楽』邦楽社　1984
町田嘉章・浅野建二編『日本民謡集』岩波文庫　1960
三隅治雄他『日本民謡全集』3　関東中部編　雄山閣　1975
服部龍太郎『日本民謡全集』角川文庫　1969
婦人会民謡クラブ編『ふじはし郷土盆踊歌集』1996
御水尾院勅撰『諸国盆踊唱歌』1661～1672
『山家鳥虫歌』1771
畠山兼人編『民謡新辞典』明治書院　1979
西岡光夫・酒井菫美『石見の民謡』山陰文化シリーズ19　1966
福井県民俗学会編『福井の民謡』1967
高野斑山・大竹紫葉『俚謡集拾遺』六合館　1915
青森県教育委員会『青森県の民謡』
日本放送協会編『日本民謡大観』東北篇、中部篇（中部高地東海地方）
伊奈森太郎『愛知県地方の古民謡』1951
笠松町『ふるさと笠松』1983
笠松町『笠松町史　上巻』1956、『同　下巻』1957
川島町『川島町史』1982
久瀬村『久瀬村史』1973
北方町『北方町史』1982
谷汲村『谷汲村史』1977
田中豊『続　我が故郷北方』1994